

母校での教育実習はとても充実したものとなった。3週間があつという間で、密度の濃い日々を過ごすことができた。その中で、多くのことを学ぶことができた。

社会科の授業では、「生徒にどう考えさせるか」が一番大切であると理解した。教師が生徒に教え込むのではなく、いかに生徒に考えさせるかが重要である。その際、図や発問によって生徒に考えさせるが、先生方がさらっとこなしていることが難しいと感じた。図から読み取らせる時でも、ピンポイントでここをみるか言う必要があることや、発問での言葉の選び方が難しかった。指導教諭は多くは語らない先生であったが、その言葉一つ一つが適切で、簡潔だった。「生徒にどう考えさせるか」に至るまでに、生徒にイメージをさせなければならない。テーマを与えるのは良いが、その際、イメージさせなければ生徒は考えにくい。教師の言葉かけで、簡潔にわかりやすくイメージさせることの重要性も学んだ。

また、授業では、生徒との信頼関係が重要であることも学んだ。私は、信頼関係がある程度築けたため、何とか授業が成立した。生徒に助けられた部分が大きかった。だが、他の教育実習生は、担当の学年が違うこともあり、信頼関係があまり築けず、大変そうだった。授業を行う際、生徒との信頼関係も重要な要素となることがこの実習でわかった。

実習6日目に体育祭があった。ここでは、普段まとまりのない学年でも応援し合う様子が見受けられ、ほとんどの生徒が全力で競技に向き合っていた。事前準備や片付けでも、仲間と協力する姿や、自分から動こうとする生徒もおり、このような特別活動では、団結力や協調性、自主性を育むことができると感じた。また、体育祭では伝統になりつつある大漁舟の踊りがある。その際、地域の人に演技指導をしてもらったり、太鼓で演奏していただいていた。学校と地域の繋がりは大切と授業では習っていたが、その具体例を見ることができてよかった。また、パソコンの修理などでも、できるだけ地元の企業に依頼している姿も見受けられ、地域を大切にすることは重要であると認識した。

授業実践では、うまくいかないことが多かった。だが、その都度、指導教諭が改善策の例を出して、的確に指導して下さった。この実習で、教師の仕事の多さを、身をもって感じた。そのため、先生方には頭が上がらない。教師の仕事は多いとニュースや大学の授業で知っていたが、現実を知ると驚いた。1日6コマあるうちのほとんどに授業が入っていて、授業がない時でも会議などがあつた。部活が終わってから、保護者対応をしていたり、二者懇談の日程を組んだり、生徒部会で夏に向けての調整など、仕事が多く同時並行で行うことが多いと感じた。朝早くから出勤している先生も多く、教師の多忙な生活について身をもって感じた。だが、その中でも、何事にも代えがたいやりがいと充実感を味わうことができた。考え、悩み、苦しい時があつたが、先生方と生徒のおかげで充実した実習とすることができた。